武蔵野幕屋　日曜聖書講筵

# シュラミの乙女

## ――雅歌書第1章～3章5節――

１９７６年２月15日
小池辰雄

歌の中の歌　シュラムの田舎娘　相手は牧羊者　シャロンの野花　私は汝のもの、汝は私のもの　愛の幕屋構造　祈り

【雅歌1】

1これはソロモンの雅歌なり　2ねがわしきは　彼その口の接吻をもて我にくちつけせんことなり　汝の愛は酒よりもまさりぬ　3なんじの香　膏は其香味たえに香しく　なんじの名はそそがれたる香　膏のごとし　是をもて女子等なんじを愛す　4われを引きたまえ　われら汝にしたがいて走らん　王われをたずさえてその後宮にいれたまえり　我らは汝によりて歓び楽しみ　酒よりも勝りてなんじの愛をほめたたう　彼らは直きこころをもて汝を愛す

5エルサレムの女子等よ　われは黒けれどもなお美わし　ケダルの天幕のごとく　またソロモンの帷帳に似たり　6われ色くろきが故に日のわれを焼きたるが故に我を視るなかれ　わが母の子等われを怒りて我に葡萄園をまもらしめたり我はおのが葡萄園をまもらざりき　7わが心の愛する者よ　なんじは何処にてなんじの群を牧い　午時いずこにて之を息まするや　請うわれに告げよ　なんぞ面を覆える者の如くしてなんじが伴侶の群のかたわらにおるべけんや

8婦女の最も美わしき者よ　なんじ若しらずば群の足跡にしたがいて出ゆき牧羊者の天幕のかたわらにて汝の羔山羊を牧え

9わが佳耦よ　我なんじをパロの車の馬に譬う　10なんじの腺には鏈索を垂れなんじの頭には珠玉を陳ねて至も美わし　11われら白銀の星をつけたる黄金の鏈索をなんじのために造らん

12王其席につきたもう時わがナルダ其香味をいだせり　13わが愛する者は我にとりては　わが胸のあいだにおきたる没薬の袋のごとし　14わが愛する者はわれにとりてはエンゲデの園にあるコペルの英華のごとし

15ああ美わしきかなわが佳耦よ　ああうるわしきかな　なんじの目は鴿のごとし

16わが愛する者よ　ああなんじは美わしく　また楽しきかな　われらの牀は青緑なり　17われらの家の棟梁は香柏　その垂木は松の木なり

【雅歌2】

1 われはシャロンの野花 谷の百合花なり
2 女子等の中にわが佳耦のあるは荊棘の中に百合花のあるがごとし
3 わが愛する者の男子等の中にあるは林の樹の中に林檎のあるがごとし 我ふかく喜びてその蔭にすわれり その実はわが口に甘かりき 4 彼われをたずさえて酒宴の室にいれたまえり その我上にひるがえしたる旗は愛なりき 5 請うなんじら乾葡萄をもてわが力をおぎなえ 林檎をもて我に力をつけよ 我は愛によりて疾みわずらう 6 彼が左の手はわが頭の下にあり その右の手をもて我を抱く 7 エルサレムの女子等よ 我なんじらに獐と野の鹿とをさし 誓いて請う愛のおのずから起こるときまでは殊更に喚起し且つ醒すなかれ 8 わが愛する者の声きこゆ 視よ山をとび岡を躍りこえて来る 9 わが愛する者は獐のごとくまた小鹿のごとし 視よ彼われらの壁のうしろに立ち 窓より覗き 格子より窺う 10 わが愛する者われに語りて言う わが佳耦よ わが美わしき者よ 起ちていできたれ 11 視よ 冬すでに過ぎ 雨もやみて はやさりぬ 12 もろもろの花は地にあらわれ 鳥のさえずる時すでに至り 班鳩の声われらの地にきこゆ 13 無花果樹はその青き果を赤らめ 葡萄の樹は花さきて その香わしき香気をはなつ わが佳耦よ わが美わしき者よ 起ちて出できたれ 14 磐間におり断崖の匿処におるわが鴿よ われに汝の面を見させよ なんじの声をきかしめよ なんじの声は愛らしく なんじの面はうるわし 15 われらのために狐をとらえよ 彼の葡萄園をそこなう小狐をとらえよ 我等の葡萄園は花盛りなればなり 16 わが愛する者は我につき 我はかれにつく 彼は百合花の中にてその群を牧う 17 わが愛する者よ日の涼しくなるまで 影の消ゆるまで身をかえして出ゆき 荒き山々の上にありて獐のごとく小鹿のごとくせよ

【雅歌3】

1 夜われ床にありて我心の愛する者をたずねしが 尋ねたれども得ず 2 我おもえらく 今おきて邑をまわりありき わが心の愛する者を街衢あるいは大路にてたずねんと 乃ちこれを尋ねたれども得ざりき 3 邑をまわりありく夜巡者らわれに遇いければ 汝らわが心の愛する者を見しやと問い 4 これに別れて過ぎゆき 間もなくわが心の愛する者の遇いたれば 之をひきとめて放さず 遂にわが母の家にともないゆき 我を産みし者の室にいりぬ 5 エルサレムの女子等よ 我なんじらに獐と野の鹿とをさし誓いて請う 愛のおのずから起こる時まで殊更に喚起し且つ醒すなかれ

## ●歌の中の歌

雅歌書を始める前にちょっと『無者キリスト』に対する手紙を読みます。キリスト新聞社の武藤富雄さんが「『無者キリスト』を読む」という社説を載せた。社説にああいうものを載せるということは非常に例外的なことなんだそうですが。そのために相当、いい意味における波紋を起こしているようであります。……（獨協大学ドイツ語科の大和邦太郎教授、京都の市川喜一氏の手紙ほか省略）……。

そういうことで、本当に読む人はみんな感じてくれるわけですが、いわゆる無教会からは何とも言ってこない。それだけパリサイなわけなので、この刊行会としてやってみると、やはりいろんなことが分ってくる。真理に対する――真理は私するべきものではないですから――真理に対する謙虚な気持がこのやはり無の世界なのです。……（5組の会員の結婚式の予定の話省略）……

「雅歌書」はヘブライ語では「シール　ハッシリーム」といいます。「歌の中の歌」という――「ハッシリーム」というのは複数で――「ザ ソング オブ ザ ソングズ」(the song of the songs) という意味です。ラテン語では、「カンティクム カンティコールム」という。……

ダンテあたりも、それからゲーテもこの雅歌書は愛読したわけです。「歌の歌」、ドイツ語でいうと「ダス　リート　デァ　リーダー」(das Lied der Lieder) という。これはいろいろ解釈の仕方がありますけれども、本来これはもちろん恋愛歌です。恋歌として、恋愛詩として、これは歴史的に最古とは言わないかもしれませんけれども、これだけの構造を持ったものとしては一番古いものでしょうね。紀元前3世紀、ギリシヤ時代に書かれたものと学者は推定しています。それがなぜこの聖典の中に入ってきたか。もちろんこの一貫した愛がドラマチックに劇的に展開して、神さまに対する愛を貫くという、また神・キリストのエクレシヤに対する愛という、そういったような比喩的な角度からこれをとらえて、変わらざる愛という意味でこの中に入れたというようになったらしい。詩そのものとしても、文学としても実に素晴らしい表現をしています。大胆な表現をしている。

これとちょうど相対するものが「伝道の書」「コーヘーレス」です。

**「空の空なるかな、すべて空なり」**

と。聖書の中には、人間の考えるところの一切のものが入っている。どんなイズムもみんな入っている。伝道の書なんかニヒリズム式だものな。一切が空だという。どんなイズムもみんな包んでしまって、そしてそれを大きな超イズムの、超理念の世界からそれを捕まえているのが、私が言っている

「聖書がいかに大きな素晴らしいドラマであるか」

ということです。

王様がこの田舎娘を――昔の王様というのはそうなのですから、そこらを歩いては、きれいな女の子を捕まえてきたわけです――その田舎娘、それはちょうど秋田美人みたいな

ものでしょうね。それを後宮に入れようとした。けれども、それに対してこのシュラミの娘は自分の本当の恋人に対する愛を貫くという構造とみるのが、一番正しい見方のようであります。……（聖書の口語訳、文語訳の話省略）……

とにかく、今の若い人はもっと古典を読まなくてはダメです、漢文にしろ。精神的なものはみな――聖書にしたって、論語でも孟子でも何でも全部――古典が源泉になっている。自然科学の世界はどしどし展開していいですよ。けれども、それが非常に跛行して、びっこになっているわけだ。精神科学の方が本当に古典を掘り下げていないから。そして漢字制限なんかして、もう古典が読めなくなってしまった。とんでもないですよ、今の教育は。

## ●シュラムの田舎娘

**1これはソロモンの雅歌なり**

とありますけれども、これは後から権威付けるために、

**「これはダビデの歌なり」**

というのと同じことです。ソロモンという人は詩人でもあったし、なかなか音楽にも優れた人で、いわゆる才子であったようですから。そこで、権威付けるために「ソロモンの雅歌なり」とした。学的には、ソロモンが書いたとはほとんどしていないわけです。

**2ねがわしきは 彼その口の接吻をもて我にくちつけせんことなり**

もう第1節にこういうことが書いてあるものだから、驚いてしまうわけです、

「聖書にそんなのがあるんですか!?」

なんてね、知らないのが。

「まぁ雅歌書を読んでごらん」

なんていうわけです。

**汝の愛は酒よりもまさりぬ**

酒には酔うけれども汝の愛は酒以上だと、実に率直な大胆な表現です。万葉集も相当ですけれども万葉の背景は仏教的な世界でありながら、仏教的なものがほとんど出てない。万葉集というのは非常に日本人の人間性がそのまま出ている。それが非常に素朴であり、そして表現が斬新であるので、文学として素晴らしい。

**3なんじの香膏は其香味たえに香しく なんじの名はそそがれたる香膏の ごとし 是をもて女子等なんじを愛す**

この1節から書いている事態は、ここにいう「シュラミの乙女」がその恋人に向かって言っている文句であると、そう見ていいと思います。素晴らしい青年だものだから、

**「娘ら汝を愛す」**

なんて、女の子たちに愛せられるというわけだ。「シュラミ」というのは6章13節に出ている。

**「13帰れ帰れ シュラミの婦よ 帰れ帰れ われら汝を観んことをねがう なんじら**

**何とてマハナイムの跳舞を観るごとくにシュラミの婦を観んとねがうや**（雅歌6・13）

と。「シュラミ」というのは地名らしい。原語では「ハ　シュラミーツ」という。ヘブライ語は、子音3つが一番基本になっている。「シャーラーム」という字は――「シャーローム」「平安、平和」という有名な名詞がある――コンプリート(complete)な完結した意味です。「完結、全さ」それから心が実に落ち着いて動かないような、「心に平安がある」こと、「人と人との間が何も問題のない平和である」こと、そういった「全さ」です。コンプリートネス(completeness)です。「シャーラーム」という字は、その普通の言葉としては「全さ」を意味する。ヘブライ語の地名は普通名詞からかなり出来ています。これはナザレの東南にタボル山というのがある。そのタボル山から西南くらいに当たった所にこの「シュラム」という地名がある。そこの女という意味なんだ、「シュラミーツ」というのは。「シュラミーツ」という女性形の語尾だから、「シュラムの乙女」と訳した。シュラムの女の人、シュラムの田舎娘というわけです、「秋田娘」というのと同じように。

**なんじの名はそそがれたる香膏のごとし**

「そそがれたる香膏」とは素晴らしい言葉ですね、「膏注がれたる者」というのは「メシヤ」ですから、それと関係しているわけです。キリストはまるでその「注がれたる香膏」みたいな人ですから。

**是をもて女子等なんじを愛す　4 われを引きたまえ　われら汝にしたがいて走らん　王われをたずさえてその後宮にいれたまえり　我らは汝によりて歓び楽しみ　酒よりも勝りてなんじの愛をほめたたう　彼らは直きこころをもて汝を愛す**

「後宮」というのは密室みたいな所です。……（昔、北京の紫禁城へ旅行した話省略）……

**5 エルサレムの女子等よ　われは黒けれどもなお美わし　ケダルの天幕のごとくまたソロモンの帷帳に似たり**

「ケダル」というのは詩篇にも出てきますが、アラビヤの北の方の遊牧の民です。その天幕はみな羊や牛の皮をはいで、それを天幕の幕にする。少し黒ずんでいる。けれども、雨は漏らない。大体、山羊を一番使ったらしい。それが「ケダルの天幕」。「ソロモンの帷帳」は、もちろんこれは美わしいことの形容詞です。ソロモンの、王様の帳ですから、非常に立派なもの。それに「似たり」という。

**6 われ色くろきが故に日のわれを焼きたるが故に我を視るなかれ**

太陽で日焼けしているからといって、自分を怪しみて見るなと。

「ブラックビューティ」という言葉があるね。あの『黒馬物語』〔“Black Beauty”１８７７年刊 イギリスの女流作家アンナ・シュウエルの小説〕という本を私は中学の3年か4年の時に読んだけれども、実にいい文章です。その内容が大変いい。ああいうのを高等学校の生徒に読ませるといい。

**わが母の子等われを怒りて我に葡萄園をまもらしめたり　我はおのが葡萄園**
**〔さえも〕をまもらざりき〔に〕**

「怒りて」といいましても、相当お母さんは自分を鍛えた意味で使った言葉らしい。

## ●相手は牧羊者

**7わが心の愛する者よ　なんじは何処にてなんじの群を牧い　午時いずこにて之**
**を息まするや**

非常に牧歌的な、相手は牧羊者ですね、彼女の恋人は。

**請うわれに告げよ　なんぞ面を覆える者の如くしてなんじが伴侶の群のかたわ**
**らにおるべけんや**〔汝の伴侶の群の中を我のさ迷うことのなからんために〕」

「いずこにて群を養う」という讃美歌（527）がありますね、「わが喜びわが望み」という、あの讃美歌はこの雅歌書からとったわけです〔歌詞：「慕い奉る飼い主よ、いずこの牧場にその群を主は導き養いたまえる」〕。牧羊者を慕っている気持が非常にこの言い方には表れています。そこまでがシュラミの女の言葉のようです。それに対して、８節は相手の人ではなく、エルサレムの女の人たちが言っている言葉です。

**8婦女の最も美わしき者よ　なんじ若しらずば群の足跡にしたがいて出ゆき**
**牧羊者の天幕のかたわらにて汝の羔山羊を牧え**

この文句だけが、そういった第三者の文句で、このシュラミの娘の自然の美、むしろ日に焼けた、白粉なんか塗ってない、そういう美というものをここで讃えて、そして

**「知らないならば、群の足跡にしたがって行け」**

という。第９節はどうも、王様のソロモンの言葉らしい。ちゃんとそういうようにちょっと断ったらいいのだけれども、ヘブライの詩には一向そういうように断り書きがない。

**9わが佳耦よ　我なんじをパロの車の馬に譬う　10なんじの腺には鏈索を垂れ**
**なんじの頭には珠玉を陳ねて至も美わし　11われら白銀の星をつけたる黄金の**
**鏈索をなんじのために造らん**

そんなことは牧羊者が言いっこない。王様でなくては、こんな表現はないわけですから、これは王様の言葉です。王様はこの田舎娘を自分の「わが愛する者」とやってしまっているわけで、さきほどの後宮に入れるわけですから。そうすると今度は、シュラミの乙女が、

**12王其席につきたもう時わがナルダ其香味をいだせり　13わが愛する者は我**
**にとりては　わが胸のあいだにおきたる没薬の袋のごとし　14わが愛する者はわ**
**れにとりてはエンゲデの園にあるコペルの英華のごとし**
**15ああ美わしきかなわが佳耦よ　ああうるわしきかな　なんじの目は鴿のごとし**
**16わが愛する者よ　ああなんじは美わしく　また楽しきかな　われらの牀は青緑**
**なり　17われらの家の棟梁は香柏　その垂木は松の木なり**

15節は牧者、牧人の言葉。それから、16、17節それから2章1節はシュラミの乙女の言葉とみたらいいようです。

「ナルダ」は新約にも出てくるあの「ナルドの香油」です。ヒマラヤの南方のネパール高原にできる有名な香料です。これは東の方から持ってくるので大変なものです。「席につく」という「席」という字は実は寝椅子のことです。

この詩は、現実とそれから夢の自分が思っている現実――普通の現実とそれから自分が牧人を思っている現実――そういうのが交互に出てくる。

13 **わが愛する者は我にとりては わが胸のあいだにおきたる没薬（もつやく）の袋のごとし**

「没薬」というのはやはりアラビヤ産の香料の、ミルラの木だという。灌木で、非常に匂いがよく、白い膏がとれて、芳香を放つものらしい。

14 **わが愛する者はわれにとりてはエンゲデの園にある**

「エンゲデ」というのは死海の西から南の方にかけての豊沃な地です。そこにオアシスがあって、「エンゲデの園」というのはそのオアシスのことをいう。

**コペルの英華（はなぶさ）のごとし**

「コペル」は、「コーフェール」というけれども、これがやはり灌木できれいな花が咲く。やはり白いような花で、婦人の香水の材料でもあるようです。

15 **ああ美（うる）わしきかなわが佳耦（とも）よ ああうるわしきかな なんじの目は鴿のごとし**

これは牧人の言葉です。「鳩」という表現はここからも来ているかもしれませんね、ドイツ語で「鳩」（Taube）というと「恋人」のことをいう。

16 **わが愛する者よ ああなんじは美わしく また楽しきかな われらの牀（とこ）は青緑（みどり）な**
**り**17 **われらの家の棟梁（うつばり）は香柏 その垂木（たるき）は松の木なり**

これはシュラミの女の言葉ですよ。この「牀」はホテルの床とは違う。「緑」というのは青草の上。「我々は青草の上に寝る」という。青草の上に天幕を張るから床が青草であると、なかなか自然の中の事態を言っている。

17 **われらの家の棟梁は香柏 その垂木は松の木なり**

荒削りの自然の木でもって出来ていると。

## ●シャロンの野花

2章に続いて、

1 **われはシャロンの野花（のばな） 谷の百合花（ゆり）なり**

「シャロンの野花」は、野原のバラ、ちょうどゲーテやあの民謡に出てくるのも、やはりこういったものがヒントになっていたかも知れません。カルメル山の方に向かってずっと伸びているシャロン、そこにはサフランが咲いている。「野花」といいましても、これはある写本では「サフラン」ということになっている。「谷の百合」は、「ショーシャンナー」と

いう。「スザンナ」(Susanna) という女の名前は「百合」という字です。百合といいましても、日本人がいうような百合とはちょっと違うようです。キリストが「野の百合」と言われたのは「アネモネ」だったらしい。それから非常にケシの花が多い。素晴らしい色をしています。パレスチナにはそういったアネモネ、サフラン、グラジオラスの一種、ケシが非常に多いようです。要するに、

「自分はそういう、自然の花のような美わしさを持っていますよ」

というわけだ。そうすると今度は、第2節は牧人の言葉です。

**2 女子等の中にわが佳耦のあるは荊棘の中に百合花のあるがごとし**

1節に対して2節をもって答えたわけです。「荊棘の中の百合花」のようだと。それからまた3節はシュラミの乙女で、今の言葉に対して答えたわけです。

**3 わが愛する者の男子等の中にあるは林の樹の中に林檎のあるがごとし**

この「林檎」というのは、我々の考えるようなリンゴでいいのかよく知りませんが、あそこはネープル式なのものがあると思うが、リンゴはどうですかね。まぁしかし、リンゴに類するものはあるんでしょう。

**我ふかく喜びてその蔭にすわれり その実はわが口に甘かりき**

ということは、リンゴの木とその牧者とを譬えて言ったので、そのそばにいることがうれしいという。

**4 彼われをたずさえて酒宴の室にいれたまえり その我上にひるがえしたる旗は愛なりき**〔彼我をその喜びの家に伴い愛の旗を高く翻したもう〕

「喜びの家」というのは、そんな立派な家ではない。ちょっとほっ建て小屋みたないな家。四阿みたいなもの、天幕の少しいいようなものです。

**請う なんじら乾葡萄をもてわが力をおぎなえ 林檎をもて我に力をつけよ**

果物はもちろん元気を出させますから、特に干し葡萄は。葡萄は一番血になりやすいから、こういうことを言っているんでしょう。

**我は愛によりて疾みわずらう**

ということは、なかなかその恋人に逢えないものだから、王様にとっ捕まってしまっていて。

**6 彼が左の手はわが頭の下にあり その右の手をもて我を抱く**

これは想像上のことで、今の現実を言っているわけではない。抱かれる時の様子を書いてしまった。

**7 エルサレムの女子等よ 我なんじらに獐と野の鹿とをさし 誓いて請う**

羚羊とか牡鹿というのは非常に足が早くて、その牝の所にとんでいったりする。そういうやはり愛のひとつの表現を、こういう羚羊とか牡鹿といって譬えたわけです。

**愛のおのずから起こるときまでは殊更に喚起し且つ醒すなかれ**

「わが情愛の自ずから出づるまでは呼び覚ますな」

と、あるいは「興奮させるな」ということが書いてある。ここのところは原文的にも少し問題のあるところです。

「自分は自ずから、もちろん愛が起こってくるが、それまでにいろんなことでかき乱すな」

ということのようであります。そうすると今度はちょっとまた変わって、８節。言っている者はやはりシュラミの女ですが。

**8わが愛する者の声きこゆ 視よ山をとび岡を躍りこえて来る**
**〔聞けわが愛する者なり、見よ彼は来る、山の上を跳び越え、岡の上を躍り越えて〕**

ここのところは非常に美わしいところです。自分は王様の後宮の中に囚われているが、牧者がそれを探りに来たらしい。

**9わが愛する者は獐のごとくまた小鹿のごとし 視よ彼われらの壁のうしろに**
**立ち 窓より覗き 格子より窺う 10わが愛する者われに語りて言う わが佳耦よ**
**わが美わしき者よ 起ちていできたれ 11視よ 冬すでに過ぎ 雨もやみて はやさ**
**りぬ 12もろもろの花は地にあらわれ 鳥のさえずる時すでに至り 班鳩の声わ**
**れらの地にきこゆ 13無花果樹はその青き果を赤らめ 葡萄の樹は花さきて その**
**香わしき香気をはなつ わが佳耦よ わが美わしき者よ 起ちて出できたれ 14磐間**
**におり断崖の 匿 処におるわが鴿よ われに汝の面を見させよ なんじの声をき**
**かしめよ なんじの声は愛らしく なんじの面はうるわし**

ここは詩的にも非常に美わしいところです。これは牧者の声です。あるいは、これは「春の歌」とも言われています、２章８節から17節まで。それから15節がちょっとちがう。

**15われらのために狐をとらえよ 彼の葡萄園をそこなう小狐をとらえよ**

狐はだいぶ葡萄園を荒らすとみえる。これはイザヤ書５章にも出ている。

**我等の葡萄園は花盛りなればなり**

**●私は汝のもの、汝は私のもの**

それから今度はまたシュラミの女の言葉です。さきほどのは牧者です。

**16わが愛する者は我につき 我はかれにつく**
**〔わが愛するものは我のもの、我は彼のものなり〕**
**百合花の中にてその群を牧う**

この16節の言葉、

「わが愛するものは自分のもので、自分は彼のものである。彼は百合の花の中でその群を養っている」

と。16節が非常に美わしい言葉で、しかもこれが信仰的な現実を譬えているといって、これは非常に評価される言葉の一つなんです。

「私は彼のもの、彼は私のもの」
もうひとつそれを直接的にいうと、
「私は汝のもの、汝は私のもの」„Ich bin dein, du bist mein.“
という。この言葉はベートーヴェンがあの「不滅の恋人」にあてた手紙の終わりに出ている言葉です。相手がどの女性だか、二、三人あがっているが、わからない。これはもちろん雅歌書からもきているし、そしてその牧者は美わしき百合の中で羊を飼っている。詩篇23篇のように天国的な現実です。
「どんなことがあっても、これは変わらない」
と。これがキリストと我々一人びとりの――また、エクレシア、召団とか、幕屋とか、教会とか言われている――これはパウロが書簡の中で、結婚のことをその角度から言っている。その一番先の文学的な表現として、この雅歌書の2章16節があるわけです。

**17わが愛する者よ 日の涼しくなるまで 影の消ゆるまで身をかえして出ゆき 荒き山々の上にありて獐のごとく小鹿のごとくせよ**

**【雅歌3】**

**1夜われ床にありて我心の愛する者をたずねしが 尋ねたれども得ず**

これは夢の中だ。

**2我おもえらく 今おきて邑をまわりありき わが心の愛する者を街衢あるいは大路にてたずねんと 乃ちこれを尋ねたれども得ざりき 3邑をまわりありく夜巡者らわれに遇いければ 汝らわが心の愛する者を見しやと問い 4これに別れて過ぎゆき 間もなくわが心の愛する者の遇いたれば 之をひきとめて放さず遂にわが母の家にともないゆき 我を産みし者の室にいりぬ 5エルサレムの女子等よ 我なんじらに獐と野の鹿とをさし誓いて請う**

おもしろい誓い方をするね。

**愛のおのずから起こる時まで殊更に喚起し且つ醒すなかれ**

「他のもので乱すな」ということ――さっきと同じように――二度目にまたその言葉が出てきてます。
「醒めて思い寝て夢見る、忘れぬは御国」
という讃美歌（486）があるね。醒めて思い寝て夢見る、忘れぬは御国である。醒めて思い寝て夢見る、忘れぬはキリストである。〔歌詞：「さめておもい、いねて夢み、わすれぬはみくに。いよよ栄ゆるおもかげ見ゆ、かすみは日に消えて。」〕
この雅歌書の一番終わりに、私は愛についての哲学ないし神学的な話をしますけれども――今日はいたしません――パウロの愛の対象は正にキリストです。彼は独身であった。独身であろうと、男であろうと女であろうと、結婚しようが結婚しまいが、あるいはどちらかに早く別れようが、とにかく信仰者にとっての愛の窮極の愛はキリストです、キリス

トを通して神です。

いくら恋人の間でも、また夫婦の間でも、もしキリストぬきになったならば、それは長続きしない。あるいは、それは続いても、本当の祝福とはならない。本当の幸いとはならない。人間の世界は確かに直接愛です。直接愛なんだけれども、直接愛だけであったら、そいつは行き詰まる。窒息してしまう。あるいはすぐにダメになる。直接愛でありながら、しかし、その奥にもうひとつ大事な直接を持たなければダメです。その意味においては、直接愛が間接愛になるわけです、屈折するわけです、キリストという方に。

## ●愛の幕屋構造

それが幕屋の構造なんです。幕屋は三角形。けれども、夫婦の間は二角だ――「二角」といってはおかしいけれども――恋人の間も。今言ったシュラミの女と牧者との愛は、その表現は正に直接的に表現している。けれども、これが次元の違った第三者――次元の違った絶対次元の第三者はキリスト、その奥に神が隠れている。その中にと言ってもいい――これへの、またこれからの愛。だから、幕屋構造は大事だというわけです、キリストからの愛が。そういう構造です。

相対的現実の中に絶対的な愛の質が隠されているかどうか。この愛の質が隠されていなかったら、人間の間のエロース的な愛だけを強調して――それを否定するのではない。エロース的なものは神さまがそういう衝動をつくっているんだから――そのエロース的な衝動の奥にアガペーの愛があるか、これが大事なことです。それがないと、この直接愛は決して祝福されたものにならない。

……女の方で、未信者の方と結婚するような場合が生じたりするよね。そのときはその奥の愛でもって相手を段々溶かしていかなくては。……ご主人を溶かして本当のキリストのところに持ってくる。これはなかなか大変なことです、女性の場合は。男性の場合は、女の人をそちらの方に持っていくのは比較的やさしいけれども、女の人が男の人を――決して議論ではダメなんだ、男は議論したらなおさら食ってかかるから――これは溶かさなければダメです、強力な上からの愛で溶かさなくては。

そういうわけでありますが、ここにはもちろんそういったものは出てこない。しかしながら、第三者の愛に対しては――この第三者というのは王様のこと、これに対しては否という――どこまでも牧者との熱い関係をここで歌っているわけだ。というのは、この熱い関係の本当の力強いものを言うためには、これ〔絶対的な愛の質〕が来てなければ、

「我はなんじのもの、汝はわがもの」

ということが窮極的な意味では実力を持たなくなる。

まぁしかし、愛というものは強いものです。そのために心中したりいろいろするから。

**「愛は死より強し」（雅歌８・６）**

という言葉が終わりの方に出てくる。

愛というものには、パトス〔情〕とロゴス〔知〕とエトス〔意〕とある。愛はパトス的な情感的なものです。それがエロースであろうと、アガペーであろうと。しかし、そこにロゴス的な論理、それからエトス的な倫理がある。この三つだけではダメなんです。まだギリシア人の愛の世界はパトスとロゴスだよ、あそこは哲学だからね。キリスト教となると、このエトスが入ってくる。エトスが入ってくるけれども、これだけだというとへたすると、固くなる。もうひとつの次元が欠けているから。アガペーはこの中でもうひとつ次元が高い。単なるエトスでもない。……

しかし、なかなか雅歌書はおもしろい。だんだん、他のゲーテやバイロンやいろいろそのうちに引用してもいいけれども。私の第二巻は『芸術のたましい』というのだが、その中にもこの雅歌書は出てきざるをえない。ゲーテの言葉には、

「人間の最大の富はゲミュート、心情である」

と言っている。ゲーテという人は正にそういった「ゲミュート」(Gemüt) ――「ゲミュート」というドイツ語はなかなか訳しにくい――「ムート」(Mut) というのは「気分」という字で、気分の総体が「ゲミュート」という。人間にはいろんな気分がある。それの渾然たる心根、情感、それを「ゲミュート」という。キリストへの、キリストからの、

「我は汝のもの、汝はわがものなり」

と、使徒たちの現実はみなこれをハッキリと――これは言うまでもなく御霊の世界です――御霊の世界に本当にこなければ言えない。聖霊が臨むというと、聖霊は最高の愛の霊ですから、そうなったら、もう何がどうなっても、絶対に心は豊かであります。では、今日はそのへんで。

## ●祈り

……荒野にまた牧場に、あなたは

**「我は牧人（まきびと）、汝らは羊」**

と、詩篇23篇の現実をイスラエル民族を通して、その現実をもって信仰の事態を、歴史を通し、またその自然を通して、あなたは諭（さと）して下さいました。また、ここに雅歌書を新しくとりあげ、この牧人に愛を誓っているところのシュラミの田舎娘と、神さま、どうぞそのような関係が、あなたとまたキリストと私たちの関係として、どこまでもあなたの愛をいただき、またその愛を人々に伝えていくところの、そして窮極は全人類が本当に、

「幾百万の人たちよ、相抱け」

とベートーヴェン・シラーが歌いましたように、その愛が浸透して本当の平和が来ますように。平和はこの愛がなくしては、参りません。いかなるロゴスをもってしても、理論をもってしても、イデオロギーをもってしても、かえってそれは争いとなり、自己主張とな

るだけでありますが、本当にあなたの人を救うところの、魂を救うところのこの愛が一切であることを、いよいよ身をもって受けとっていくことができますように願い奉ります。

かくしてもはや、一切のロゴスを乗り越え、また本当に律法を全く乗り越えて、律法を自在に満たすところの事態。いよいよ、この福音を身につけていくことができますように、我々をいよいよお鍛え下さらんことを願い奉ります。

今日は、いろいろな事情で来られなかった兄弟姉妹たちがありますが、それぞれの所において、日曜は日曜らしく、何をしていてもあなたとの交わりを深くして進んで行くことができますように、願い奉ります。

今、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれと共に、御名により捧げ奉る。アーメン。

＊

（参考）「社説『無者キリスト』を読む」（１９７６年2月7日版「キリスト新聞」より転載）

**《本体の体受とその表現**

小池辰雄著『無者キリスト』を精読した。その書評はすでに本紙に掲載されたところであるから、くわしいことを省き、本書の内容のもつ読者への迫力つき、二、三の点を紹介しよう。

信仰に関する話は、話者の人格と霊的な悟りとか、以心伝心で聴者に通ずるものであるから、これを活字を通して、著者の信仰的境地が、時に脈々と、時にひしひしと読者に迫ってくる。ちょうどパウロの書簡を読むと彼の信仰と思想とが二千年の時の経過を超越して迫ってくるのに似ている。

『無者キリスト』は四福音書への忠実を保ちつつキリストを描いた作品である。福音書に忠実だと、叙述は平板になり、聖書の記録を綴り合わせてこれをなぞったものになる。そこで、内容を魅力あらしめようとすれば、今をときめく流行作家のキリスト物のように外道（げどう）に堕する。ところが『無者キリスト』において、著者は福音書通りの事実を記述しつつ、キリストの意識の深層を洞察し、その実存を究めつくし、

「キリストの言行を本体の現象面として受け、これを媒介として本体を体受している」

のである。

「神と合一、一体の実存者、徹底的におのれを無者とし、神の無限無量の愛と生命と光を体受して生きたキリスト、無即無量の境地、そこに贖罪死があり、そこに霊体をもって活現、復活するキリストがある」

というような叙述が福音書にあるキリストの実存や事件とともに現われてくるのが本書の特徴であり、読者の心霊に迫る力をもつのは、こうしたところにある。

日本語で書かれたキリスト伝として最高の評価を与うべき書の一つであろう。

**造語の霊妙**

も一つ、興味が深いのは著者の造語力である。宗教的な悟り、霊的な深みを表現するには、既存のことばだけでは足りない。トマス・カーライルが言語を酷使して深遠な思想を表わしたように、『無者キリスト』の著者は、慣用されていないことばを創作することにより、キリストの内面、否、実存への悟入と読者へのこれが伝達を可能ならしめている。その例を示せば次の通りである。

「旧約、新約を貫いて身読・霊読せしめるものはキリストの霊である」

「みたまの貫在」

「キリストのふところへの投身」

「タリタ、クミ！　われらは倒れくずおれたとき、この言を霊聴して、霊性によみがえって邁進すべきである」

「ルカはイエスの十字架の受難、復活、昇天の大ドラマをエクソードスと表現したものと思う。これは逝去とか最後ではなくて、『出現世』である」

「聖書には次元の異なる激しい事象がたくさん記されてある……、いわゆる聖書研究などで何のかのと議論しても始まらない。研究というなら、祈り心をもって霊察、霊知する角度をもつべしである。自分の中に霊震が起きる」

「ナザレのイエスがみ霊のキリストとして、信ずる者の中に内住する実をペテロはじめ、使徒たち、その他いかなる人においてでも実証した。彼らの中にみ霊の実が止まって、本当の霊止となった」

「福音の福音たるはこの聖霊を受けないでは決してつかめない。百聞一見に如かずというように、百聞一験に如かずである」

「信徒の集まりたるエクレシア（教団）――原語はむしろ召団――は聖霊の降臨を受けて始めてエクレシアの名に価するのである」

「復活のキリストがダマスコ途上のパウロに電撃的に現われ、彼を霊撃し照破した」

「彼はキリストのみ霊の愛の力に圧倒されて、福音を言とカリスマ的なわざとを以て身証したのである」

内に溢れる霊的たまものを、少ないことばで表現して、読者、聴者に伝えることこそ、信仰的著作や説教の妙諦である。現代の教会は言語の修飾をもって、霊的内容の貧困さを補おうとする傾向がないであろうか。この書に比較して、このことを感ずる。ただし著者が無教会の学者であるためか、エクレシア（教会）への霊察が足りないことは本書の「欠け」であろう。これが著者の霊知によって将来補われ、現代の教会に霊震を起こしてもらいたいものである。》